

『夜はやさし』における女性の機能とディック転落の自己責任

飯島 昭典

## はじめに

一人の才能ある男性が結婚により転落していく物語。こんな風に簡単にF・スコット・フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald, 1896-1940)の人気作『夜はやさし』(*Tender is the Night*, 1934)<sup>1</sup>を要約してしまうのは、この物語の魅力を大いに損ねてしまうに違いない。作者の結婚がこの作品に深く影響しているのは、多くの批評家が述べていることであり、疑いようのない事実なのだが、まず我々はテキスト中の言葉が伝える意味を十分に理解し、それを自分の経験と感覚に照らし合わせて、鑑賞というリアクションから批評を始めなければならないのではないだろうか。この物語は作品外の情報の手助けを借りずとも、十分に我々の知的興奮を刺激するものである。

フィッツジェラルド自身が破滅的な結婚によって転落を経験したように、この作品の主人公ディック(Dick)は精神病患者ニコール(Nicole)との結婚によって、輝かしい未来を失って転落していったように思える。ディックが学者としての名声を失い単なる町医者として地位を落としていく理由は、様々な批評家が述べているところである。ウィリアム・ワッサーストーム(William Wasserstorm)は、ディック自身を時代に合わせられなかった人物として「ディック・ダイバーはアメリカ文学の中で最初に場違いとなった人物であり、ある世代のメンバーによって作られた人物である。それは失われたのではなく場違いとなった世代なのだ」(“ Dick Diver is the first displaced person in American literature, created by the one member of a generation not the lost but the displaced generation ”)(145)としている。そしてジェイムズ・F・ライト(James F. Light)は、彼が「上流のブルジョワジー」(“ haute bourgeoisie ”)(137)によって裏切られた人物であり、「特権に基づく悪しき構造」(“ the evils of a system based on privilege ”)(137)の犠牲者、つまり「フィッツジェラルドの『夜はやさし』の根

源的な意図は、作品中で社会的な非難を声高に主張する事だった」(“ Fitzgerald’s original intent in *Tender is the Night* was to emphasize the social criticism in the novel ”)(136)としている。

これら二人の批評家は時代と階級という外部の力にディックの転落の原因を求めているが、ジョン・F・キャラハン(John F. Callahan)は破滅の原因の内在性を挙げており、「ディック・ダイバーの崩壊は、はっきりと言えないコンテクストと意識から発生しているので、恐ろしいのだ。彼自身の価値観によって混沌の犠牲者になり、閉じた知覚の堂々巡りに陥るのだ」(“ Dick Diver’s disintegration is horrible because it results from a context and consciousness now incapable of articulation. His values make him a casualty of chaos and lead to a closed circle of perception ”)(189)としている。

外部の力が破滅の原因の一部になったのはもちろんの事であるが、私が議論の出発点とするのは、キャラハンと同じように転落の原因の内在性である。作品が始まる前のプロローグとしてフィッツジェラルドはキーツの詩を引用している。

Already with thee! Tender is the night,  
But here there is no light,  
Save what from heaven is with the breezes blown  
Through verdurous glooms and winding mossy ways.

#### ODE TO A NIGHTINGALE

すでに汝と共に、夜はやさし、  
しかし、ここに光はなし、  
あるのは天から吹いてくるそよ風のみ、

木の下の闇を抜けて、うねった苔むす道を吹き抜けてくるのだ。

「ナイチンゲールに寄せる詩」

吹き抜ける風のみが存在するという孤独感、そして「汝」(“thee”)という言葉によって自分一人だけの状態を強く読者に意識させないだろうか。つまりこの孤独は、一人の人間の責任というのを印象づけるのに相性がいいのである。テキストに存在する言葉が全て意味をなしていることを考えるならば、この詩の引用はディック自身による責任という印象を引き出すのに都合がいい。それゆえ、私はディックの状態は外部の力によって決定されるのではなく、自身の行動と考えの結果決定される、つまり転落の原因をディック自身に求める方が適切と考えるのである。

タイトルの『夜はやさし』を考えた時、太陽が司る昼の男性性に対して月の司る夜は女性性の象徴である。<sup>2</sup>古代の神話に基づくこの原理を考えて、夜、つまり女性原理にマイナス面を見いだすのは不適當と思えるのである。月の女神と関連付けられる『夜はやさし』のタイトルを考えたなら、フィッツジェラルドが、主人公ディックの破滅の原因に、ニコールとの結婚という女性のマイナス面だけを挙げている、と考えるのは間違っているのである。ここで証明しようとするのは、ディックの破滅の原因は一体何であるか、ということである。以下、第1節で「ディックの潜在的危うさ」、第2節で「依存性の強いディック」を扱い論を進め、結論を導き出すことにする。

## 1. ディックの潜在的危うさ

ディックはこの作品の冒頭に、未来ある若者として登場して、「年は26才、男として申し分のない年齢であり、まさに独身時代の最盛期」(“he was twenty-

six years old, a fine age for a man, indeed the very acme of bachelorhood ”)(3) を表わす人物として描かれている。ディックに対して多くの費用が投資され、価値ある人物と考えられていたゆえに、第一次世界大戦中にもかかわらず、兵役の義務は負っていなかったのである。彼に対する外からの評価のみならず、ディック自身も研究者としての重要性から、自分は戦争から逃げているのではなく、「戦争が自分に関与しないだけの話だ」(“ the war didn't touch him at all ”)(3) という自信を見せているのである。この時期のディックはまさに「得意で英雄的な時代」(“ a favorite, an heroic period ”)(4)を経験している自信に満ちた青年であると言えるであろう。

研究者の歩む道として順風満帆な滑り出しを見せている若者にとって自信がある、という事は必ずしも悪いことではない。自信によって挑戦する気持ちも生まれてくるだろうし、結果もついてくる、というのは良くある事である。若者であるならば、余計にその感情は周囲から大目に見られることも多いし、時に好意的に見られる事も多々あるのである。

しかし、こうした自信に満ちたディックに、ある潜在的な危うさを読者は見いだすのである。ディックの自信の根拠となっている学問と研究の分野で、この得意で華やかな時代においてでさえ、ある種の欠陥に近いものを我々は発見するのである。1917年当時のディックの置かれた状況とその反応について引用してみたいと思う。

At the beginning of 1917, when it was becoming difficult to find coal, Dick burned for fuel almost a hundred textbooks that he had accumulated; but only as he laid each one on the fire, with an assurance chuckling inside him that he was himself a digest of what was within the book, that he could brief it five years from now, if it deserved to be briefed. [. . .] (4)

1917年がはじまって石炭を手に入れる事が難しくなってきた頃、ディックはそれまでため込んだ100冊ばかりの本を燃やして燃料にした。でも、その本の中身はきちんと読みこなしており、仮にその本に筋書きを作る値打ちがあるのならば、5年経った後でも筋書きは作れるんだ、と自信にほくそ笑みながら、一冊また一冊とそれらを火に入れた。必要な時には、時々これに類する事をやってのけたのだ。(……)

研究者にとって最も重要な道具は本であり、研究者の生命と言っていいものである。寒さを凌ぐために本を火にくべる事を行っていいものなのだろうか。そしてそれらの本の筋書きを作れるぐらいに読み込んでいる、とは言うものの、それは筋書きであり、何度読み返しても新たな発見をするような読み方を研究者は期待されるのではないだろうか。筋を知っているだけで読む価値がないと判断して、燃料として燃やしてしまうその行為は、駆け出しの研究者として間違った行動である、と言えるのである。この行為は、自信を超えたうぬぼれと捉えられても仕方がないものなのである。「天国の平和そのものごとき学者の落ち着き払った平静さ」(“the fine quiet of the scholar which is nearest of all things to heavenly peace”)(4)を持ってこれを行うディックに、自身の研究者の生命とも言える本を燃料として燃やす事について、何の良心の咎めも見いだす事は出来ないのである。

後に金によって自身の研究者としての心構えを捨ててしまうディックは、転落が始まる前の最盛期においてでさえも、自身の重要性の根拠になる研究者の資質について、このように疑問を生じさせるものなのである。学問に対しての良心や謙虚さに欠けるディックが、研究を名声や金と同一線上に並べて考えて、転落していったのも頷ける事実である。<sup>3</sup>ディックは学問への態度についても潜在

的な危うさを有している人物である、と言える。

フィッツジェラルドは矛盾した相反する感情を同時に処理できるかどうか、一流の人間であるかどうかの試金石になる、と述べたが主人公ディックに対してもこの矛盾した役割をフィッツジェラルドは用意している。ニコールは実の父親にレイプされるという経験を持ち、それゆえ精神を病んでしまっている。ディックがニコールの夫となる事は、ニコールがディックに対して守られる存在として、父親を意識する事になるのである。作品中でも述べられているように、ディックに対して感情転移を起こして父親の役割を期待するようになるのである。ディックは異性という夫としてニコールを愛しながらも、父親としてニコールを守らなければならない、という二つの役割を同時に与えられる事になるのである。医者として患者と妻のニコールを愛する事がいかに危険なことかは、同僚が以下の通り述べているところである。

‘What! And devote half your life to being doctor and nurse and all never! I know what these cases are. One time in twenty it’s finished in the first push better never see her again!’

‘What do you think?’ Dohmler asked Dick.

‘Of course Franz is right.’ (35)

「何だって！そんなことで君の半生を彼女の医者兼看病人として捧げるつもりなのか！絶対に駄目だ！そういったことがどんな結果をもたらすか、僕は知っている。最初の発作だけで治ってしまう例は、20のうち1つ位なものだ。二度と彼女に会わない方が君のためだ」

「君はどう思う？」ドムラーがディックに尋ねた。

「もちろん、フランツの言うとおりです」

同僚のフランツは声高に患者であるニコールを妻に持つことの危険性を述べており、ディック自身もその事を認めているのである。しかし、彼はこうした客観的な意見よりも自分の感情を優先させてしまい、感情に負ける結果になってしまう。「歩くにしたがってブルーとグレーを交互に帯びる彼女のクリーム色のドレスと、鮮やかな金髪がディックに眼をくらませるような思いをさせた」(“ Her cream-colored dress, alternately blue or grey as they walked, and her very blonde hair, dazzled Dick ”)(28)という最初の華麗な印象に引きずられて、望ましくない患者との結婚という道に踏み込んでいったディックなのである。<sup>4</sup>

ニコールは実の父親に犯されるという過去を持っているが、ディックは彼女に惹かれはじめて、その事を無視しようとする。望ましくない結婚に踏み込んでいくディックが客観的意見を無視している様子は、先の引用で説明したが、それ以前にも客観的な事実を無視する様子が見受けられるのである。ディックがニコールの二回目の訪問を受けた時、彼女の過去を無視して、「ディックは彼女が過去など持たず、夜の闇から生まれ出た住所も何も分からないような迷子の女であったならいいと思った」(“ Dick wished she had no background, that she was just a girl lost with no address save the night from which she had come ”)(29)と考えてしまうのである。これは客観的事実の無視であり、自身の感情の優先である。ニコールには冷たい過去が現実にあるのである。

感情を優先させるディックに対してブルース・L・グレンバーグ(Bruce L. Grenberg)は、ロマンティックな主人公であると述べ、「フィッツジェラルドはディックの『無邪気さ』の中に戦争を生き抜いた後の、19世紀的理想主義の残った力を表現している」(“ Fitzgerald characterizes in Dick’s “innocence” the residual force of nineteenth century idealism which survived the war ”)(217)と説明しているが、彼の述べるディックの時代錯誤の態度は、つまるところ現実の



無視、客観性の無視にも通じていくものではないだろうか。

ニコールの父親は娘という存在を無視して性的な関係を結ぶという感情に溺れた行為を行った。ディックも客観性を無視して自身の感情を優先させて、転落の道を歩んでいったのである。ニコールの父親もディックも客観的な事実よりも感情を優先させたという点では同じである。しかも、この二人はアルコールによって自分たちの破滅を助長させたという点でも似通っている。ディックが担う事になる父性と夫の二つの演じるべき役割の危うさが暗示されていると言えるであろう。

ジェイムズ・W・タトルトン(James W. Tuttleton)は、「フィッツジェラルドは直接的にはニコールを蛇のような女、魔女、吸血鬼のイメージとしては描いていない」(“ Fitzgerald does not directly characterize Nicole in image of the serpentine woman, the lamia, or vampire ”)(242)と一種の好意的見方をニコールに示しているが、ニコールという存在にディックの破滅の原因を求めていない点では、私も同意見である。客観性を無視して感情に負けたディックに原因があるのであり、間違いの結婚はディック自身の選択によるものなのである。

作品の後半でアルコールと金によって身を滅ぼしていくディックであるが、ここで述べたように最盛期の状態ですら、学問への態度、女性への態度という二つの観点で潜在的危うさを示しているのである。学問に対しては一種のうぬぼれ、ニコールに対しては現実を無視した感情の優先を行ったディックである。結果的に研究と金、そして父性と夫という二つの状態を適切に処理して自分自身を確立する事が出来なかったディックは、ここで述べたように潜在的危うさを有している人物だったのである。

## 2 . ディックの依存性

医者と患者、父と娘、夫と妻という微妙な関係の中でバランスを取っているディックとニコールは若い女優ローズマリー(Rosemary)の出現で揺さぶりを経験することになる。ローズマリーは、落ち着いた大人の男性であり地位もあるディックに次第に惹かれていくようになり、やがて恋心を抱くようになる。<sup>5</sup>ディックは妻ニコールを持つ身であり、当然ローズマリーとの恋愛を成就させるわけにはいかない。しかし、ディックのローズマリーへの態度はきわめて曖昧であり、拒絶したかと思えば求めたりと、ローズマリーをもてあそんでいるとしか思えないものである。ローズマリーはニコールの人を良さを考えて、ディックとの恋愛はあきらめる決心をする。そしてディックに「私はあなたの事をあきらめることにしたんです」(“ I’ve decided to give you up ”)(145)と実際にはっきりと告げるのである。

ディック自身もニコールの存在は無視できないし、ニコールを愛しているとローズマリーに告げておきながら、ローズマリーのこのあきらめるという告白に対しての返事が「でもそれは意地が悪いな」(“ But that’s very mean ”)(145)、「まさに興味を持ち始めた矢先なのに」(“ just when I was getting in interested ”)(145)という誘惑なのである。これはローズマリーの感情をもてあそぶ態度ではないだろうか。ユージン・ホワイト(Eugene White)は「ローズマリーはロマンティックな夢である。実際に彼女は彼に対して何でもないし、彼も彼女に対して何でもない。自分が選んだ困難な道から避けようとする事で、彼は実際に自分をおとしめたりしないのだ」(“ Rosemary is a romantic dream. In reality she has nothing for him as he has nothing for her. And in his yearning away from the difficult path which he has chosen he never really fools himself ”)(126)と述べているが、ディックの感情面でのローズマリーへの影響は無視することが出来ないのではないだろうか。

拒絶と誘惑の曖昧な態度の後、ローズマリーが取った行動をここで引用して

みたいと思う。ディックと別れた後のローズマリーの様子である。

When the door closed she got up and went to the mirror, where she began brushing her hair, sniffing a little. One hundred and fifty strokes. Rosemary gave it, as usual, then a hundred and fifty more. She brushed it until her arm ached, then she changed arms and went on brushing.  
(148)

ドアが閉まると彼女は起きて鏡の前に行き、まだすすり上げながら、髪にブラシをかけ始めた。いつもの通り、ローズマリーは150回それをかけ、それからさらにもう150回。腕が痛くなるまでブラシをかけ、それから腕を変えてさらにブラシを動かしていた。

この悲痛な様子で単純動作を泣きながら続けるローズマリーは、ひどいショックを受けている状態である。ディックの態度の曖昧さにより、悲しみは何十倍にもなってローズマリーへ戻ってきているのである。ホワイトの言うディックはローズマリーに対して何でもないという意見は、精神的な影響を全く無視していると言えるであろう。ディックはローズマリーを傷つけており、彼自身は恋の遊びという快楽を手に入れているのである。ローズマリーには与えていないが、ローズマリーからは与えられているのである。

ローズマリーがこのような悲しみを経験した後もディックは「私はあなたを好きになってしまったらしい」(“I’m afraid I’m in love with you”)(158)、「望ましいことではないんだが」(“That’s not the best thing that could happen”)(158)と発言したり、「いいかい、僕は君にひどくまいてしまった」(“Look, I’m in an extraordinary condition about you”)(180)と誘惑を続けるのである。ディッ

クの恋の遊びはいつまでも続くのである。

ニコールもローズマリーの存在に気づき、その事で彼女の病状は悪化する。10代のローズマリーには大人の男性として精神的な支えを与えるべきだが、精神的な悲しみを加え逆に傷つける、という奪う態度をディックは取ることになる。ニコールに対しても不倫の恋によって、治療する医者の仕事である治すという力ではなく、精神的に苦しめるという力になってしまっているである。

ローズマリーに対して与える力ではなく、恋の快樂を逆に与えられているディックは、女性に対して依存の状態である。ニコールに対しても既に存在している妻を持ちながらの不倫は、依存状態であると言えるであろう。ディックは導く力となる事を期待されたはずであるが、実は女性に対して依存している登場人物であると言える。

ニコールを導く役割を失ったディックがたどる道は、自身の崩壊である。アルコールが常習化して勤務中にもアルコールの匂いが消えなくなってしまうのである。患者からアルコール臭いと苦情を受ける始末となり、ニコールの姉から与えられた病院でのポストも失ってしまう。ニコールからも愛想を尽かされ、ニコールは新しいトミー(Tommy)という恋人を持つことになるのである。皮肉にもディックといる時は回復しなかったニコールの病状は、トミーの出現で回復を見せるようになるのである。ディック自身の存在がニコールに対して薄れた時、ディックは与える力となるのである。しかし、これはディック自身がニコールに対して自分で果たしている力ではなく、関係が薄れてはじめて結果的に及ぼす影響なので、純粋な意味でディックが与えている力とは言えないであろう。

しかし、ディック自身による能動的働きかけとは言えないも、ニコールの前から姿を消して行くことでニコールに対して精神的に良い影響を与えているのは確かなのである。存在が消えたマイナスの状態での与える力という言い方が出来るであろう。この働きの象徴的場面をここで引用してみたいと思う。トミー、

ディック、ニコールの三者によって離婚の話し合いが済んだ後のニコールの様子である。

Nicole felt outguessed, realizing that from the episode of the camphor-rub, Dick had anticipated everything. But also she felt happy and excited, and the odd little wish that she could tell Dick all about it faded quickly. But her eyes followed his figure until it became a dot and mingled with the other dots in the summer crowd. (386)

ニコールはあのカンフル剤のエピソード以降、ディックが全て知っていたのだと気づいて、出し抜かれたような気がした。しかし、同時に彼女は幸せを感じ、心が弾んで、奇妙なことに全てをディックに話したいと思ったりしたが、その気持ちも瞬く間に消えていった。しかし彼女の視線は彼の後ろ姿を追い、それが次第に小さくなって真夏の人混みに見分けがつかなくなるまで、じっと見守っていた。

消えていくディックを見つめながら、幸福を感じているニコールである。これはディックの存在意義が薄れて、トミーが出現して新たな幸福を見つけたニコールと重なるであろう。ディックは消えてニコールに幸せを与えているのである。消えていくことで与える影響についてアーサー・マイザナー(Arthur Mizener)は、「彼が行使せずにいられないこの力は、ニコールに自分自身を取り戻させるだけでなく、彼が近づいた人は誰でも、最も良い状態の時の自分になる事をもう一度感じさせるのだ」(“ This power he could not resist exercising, not merely to give Nicole back her self but to make everyone he came close to feel once more the self he had been at his best ”)(165)と説明している。

導き手の役割を期待されたディックは、それを果たさず逆にニコールに守られる立場となる。離婚後でさえもニコールはディックとの手紙のやりとりを欠かさず、彼の保護者的な立場を取るのである。「私はディックを愛していたし、決して彼を忘れることはない」(“ I loved Dick and I’ll never forget him ”)(391)というニコールの感情は、ディックを心配して小さな町から小さな町へと移動して行った彼を気にかけて、手紙での追跡を行った根拠となるであろう。しかし、これはトミーという新しいパートナーがいる現実を考えるならば、恋愛の感情ではなく、落ちていく男に対しての憐れみであり、心配なのである。ディックはこの意味で精神的に憐れみを受ける被保護者の役割を演じていると言えるであろう。ディックはニコールによって守られる人物となり、当初期待されたニコールの導き手になる役割から、立場を逆転させたのである。

トミーはニコールが病気になった理由を知らないが、彼女を理解して、ニコールは「トミーは私を愛していると思う。優しくて励ますようなやり方でね」(“ Tommy is in love with me, I think, but gently, reassuringly ”)(64)と感じる事が出来る。ディックはニコールの病気の理由を知っているが、彼女を理解せず、ある意味患者としてのニコールの立場が、彼の立場を確保していたのであり、病を必要としていたとも言える。二人の対比は明らかである。励ます力となるトミー、憐れみを起こすディック、導き手の役割を果たすのは当然、前者である。

この節ではローズマリーとニコールという二人の女性に対してのディックの依存性を明らかにした。10代の女性に対しての大人の果たすべき守る力は発揮せず、傷つける力となったディックである。そしてニコールという患者を治す事を期待されたディックは、逆に彼女に守られるという立場の逆転を経験した。どちらの女性に対しても導き手としての役割は果たしておらず、精神的な依存の状態を表わしているディックである。第1節に続き、ディックの精神的な危うさが明らかになったのではないだろうか。

## 結論

フィッツジェラルドの妻と作品中のニコールを重ねて、破滅的な役割を果たすディックの妻ニコール、という図式が一見すると出来上がりやすい『夜はやさし』である。ニコールだけでなく彼女の姉も財力にものを言わせてディックを医師として買うような行動をする事を考えるならば、作品中の女性にマイナスの働きを見いだすのは無理な事ではないのかもしれない。ローズマリーですら、ディックの生活を乱す原因とも考えがちである。

しかし、第1節で、学問や研究への誠実さを欠くディックや女性に対しての理性よりも感情を優先させて、間違っただ道を歩む様子を表わすディックなど、潜在的な危うさを有している事を私は証明した。そして第2節では導き手になる事を期待されたディックが10代のローズマリーに対しても依存状態であり、導くどころか保護を受けている様子を明らかにした。このようにディックは自らが欠点のない存在であるとは決して言えないのである。少なくとも患者である妻ニコールを医師と夫の両方の役割で、回復に向かわせるという役割は果たしていない。

かつてディックは「男はものを知るのだ。ものを知るのを止めたら、男はただの人になってしまい、知ることを止める前に、ものの方が力を得てしまう」(“ a man knows things and when he stops knowing things he’s like anybody else, and the thing is to get power before he stops knowing things ”)(63)と精神的な能動性をはっきり示していた。しかし彼は自分で言ったように、「ものの方が力を得てしまう」結果を自ら招いてしまうのである。金とアルコールによる怠惰な生活になっていってしまうのである。転落を始めるディックが「愛される事は、ずっと昔から恐らく自分が滅び行く一族の、最後の希望だと自覚した瞬間から、自分の習性になっていた」(“ it had early become a habit to be loved, perhaps,

from the moment when he had realized that he was the last hope of a decaying clan ”)(376)と述べるのは、前述の能動性から自分を愛して欲しいという受け身の精神への変化である。愛される事自体を望むことは悪いことではないが、それが習性となっている状態では、ニコールを導くという役割を果たせないであろう。

本稿の出発点は作品中の女性は破滅させるだけの存在であるという考えに疑問を投げかけ、ディック自身にも破滅の原因はなかったのか、という事を検討することであった。月の司る夜の女性性に注目して、『夜はやさし』というタイトルのプラス面が表わすように女性性に対しては、マイナス面だけを作品が強調しているのではないと考えたのである。ウィリアム・E・ドハティー(William E. Doherty)は「夜は魅了の時であり、日中が表わす現実の醜さを覆うものである。夜は『詩』の中のように美しさと幻覚の時である」(“ The night is the time of enchantment, masking the ugliness of reality that the day exposes. The night, as in the “ Ode, ” is the time of beauty and the time of illusion ”)(153)と夜に対してプラスの価値を与えているが、これを作品に当てはまるなら、タイトルの表わす夜の女性性について、マイナス面ばかりを強調するのは見当違いという事がわかるのではないだろうか。実際に作品の主要登場人物である、ローズマリーもニコールもディックに対してこれまで説明したように、マイナスの働きはしていないのである。

結果的にディックは、ニコールに対して回復させる働きをする事が出来ず、別の男性のトミーがその役割を果たす事になる。そして彼は破滅していく。破滅の原因はディックにあるのである。ニコールを患者と妻として引き受けたその瞬間から期待された見守る力、導く力を果たせないディック自身が金とアルコールによって、身を滅ぼしていったのが原因なのである。近親相姦という被害にあったニコールが起こすディックに対しての転移現象、つまりディックを父とし



て愛する行動に彼は応えられない。そして夫という別の異性としてもニコールに  
応える事も出来ない。父性と夫として愛する事の矛盾を解決するのは、導く力  
という共通点のほずである。しかしディックはこの2つの役割を上手く果たし、  
解決を引き出す事は出来なかったのである。以上のようにディック自身に破滅  
の原因があり、女性が原因ではないことが明らかになったであろう。

ここでは述べなかったが患者を妻とするのは、上で説明した精神的意味だけ  
でなく、職業倫理上でも問題が生じるものである。現代の世で、職業倫理を逸し  
た結果の事件等が報道で聞かれる事があるが、金を得るための手段以上に我々  
日本人は、仕事に対して意味を与えるのが好きな国民である。時代と国の違うフ  
イツジェラルドの『夜はやさし』の描く医師としての職業の意味が、文学研究  
を超えて、我々日本人読者に何らか響くものがあると思いつつ、筆者は筆を休め  
ることにする。

## 註

- 1 . 以下、『夜はやさし』からの引用は F. Scott Fitzgerald, *Tender is the Night*, Penguin Popular Classics, 1997 の版に拠る。
- 2 . ギリシア神話において、「満ちていく月」、「満月」、「欠けていく月」が太女神の3つの相「乙女」、「成熟した女」、「老女」と関連する。また月が処女神アルテミスを表わす。そして月が、眠れるエンディミオンに口づけするヘレナを表わし、地上の女神アフロディテに対応するなど、月を女神と考える神話は多く存在する。一方、聖書においても聖母マリアを「月のように美しい」と表現する記述が雅歌の若者の言葉に由来する事が確認できる。「曙のように姿を現し、/ 月のように美しい乙女はだれか」(雅歌 6 : 10) (“ Who is she who looks forth as the morning, / Fair as the moon ”)(Song of Solomon6:10)
- 3 . ディックがかつて言ったように、かつてないほどの大学者になるという言葉にも名声を求める態度として、純粋な意味での学問的探求とは言えないのかもしれない。
- 4 . この華麗なカラー・シンボリズムは『華麗なるギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)に登場するデイジー(Daisy)の描写とも通じるものがある。ディックの心象がニコールの外見に投影されている。つまり彼女に魅了されているがゆえに、華麗な外見と映るのである。
- 5 . ローズマリーの出演する映画『パパのお気に入り』もディックと関連させる事が可能である。まさに中年男性ディック、父とも言える男性のお気に入りなのである。またこのタイトルの表わすように、ローズマリーとディックの二人の愛は成就し得ない事も示唆されている。近親相姦的性格の、恋愛という名の不倫が読み取れるのである。

## 引用・参考文献

- Bicknell, John W. . “ The waste land of F. Scott Fitzgerald. ” *F. Scott Fitzgerald: a collection of criticism*. Ed. Kenneth E. Eble. New York: McGraw-Hill Book Company, 1973. 67-80. Print.
- Callahan, John F. . “ The way home: but here there is no light. ” *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald 's Tender is the Night*. Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 187-211. Print.
- Decter, Midge. “ Fitzgerald at the end. ” *F. Scott Fitzgerald: a collection of criticism*. Ed. Kenneth E. Eble. New York: McGraw-Hill Book Company, 1973. 135-42. Print.
- Doherty, William E. . “ *Tender is the Night* and the “ Ode ” to a Nightingale. ” *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald 's Tender is the Night*. Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 147-59. Print.
- Fitzgerald, F. Scott. *Tender is the Night*. New York: Penguin Books, 1997. Print.
- Fussell, Edwin. “ Fitzgerald 's brave new world. ” *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald 's Tender is the Night*. Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 110-18. Print.
- Grenberg, Bruce L. . “ Fitzgerald 's “ Figured Curtain ” : personality and history in *Tender is the Night*. ” *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald 's Tender is the Night*. Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 211-38. Print.
- Light, James F. . “ Political conscience in the novels of F. Scott Fitzgerald. ”

- Critical Essays on F. Scott Fitzgerald 's Tender is the Night.* Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 132-38. Print.
- Mizener, Arthur. " *Tender is the Night.* " *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald ' s Tender is the Night.* Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 159-70. Print.
- Nelson, Thomas. *Holy Bible: New King James version.* Ed. Thomas Nelson. Rio de Janeiro: Thomas Nelson Publishers, 2006. Print.
- Stanley, Linda C. . *The Foreign Critical Reputation of F. Scott Fitzgrald: an analysis and annotated bibliography.* Ed. Linda C. Stanley. London: Greenwood Press, 1980. Print.
- Trachtenberg, Alan. " The journey back: myth and history in *Tender is the Night.* " *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald ' s Tender is the Night.* Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 170-87. Print.
- Tuttleton, James W. . " Vitality and Vampirism in *Tender is the Night.* " *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald ' s Tender is the Night.* Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 238-47. Print.
- Wasserstrom, William. " The strange case of F. Scott Fitzgerald and A. Hyd(Hid)ell: a note on the displaced person in American life and literature." *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald's Tender is the Night.* Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 138-47. Print.
- White, Eugene. " " The intricate destiny " of Dick Diver. " *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald ' s Tender is the Night.* Ed. Milton R. Stern. Boston: G. K. Hall & Co. , 1986. 125-32. Print.